

## 「考古遺物（鉄製品）の保存処理・公開」事業の進捗状況について

廣瀬憲雄（事業責任者）

総合郷土研究所では、2019年度より3年間の予定で、「考古遺物（鉄製品）の保存処理・公開」事業を開始した。この事業は、総合郷土研究所が所蔵する出土鉄製品のうち、希少価値があり、学術的にも特に重要なものを中心に保存処理を実施し、所内での保管体制を整えることを目的としている。対象とするのは、寺西一号墳出土大刀10本のうち、大刀1～3の3本である。

今年度最大の成果は、大刀1から未知の象嵌が発見されたことである。大刀1は、事業開始前の時点で、鏝に象嵌があることが判明していたが、X線撮影を実施したのは鏝のみであり、その他の部分は未調査のままであった。本事業が開始されたことを受けて、元興寺文化財研究所で大刀3本のX線撮影を実施したところ、大刀1の刀身部分と、大刀1のものと思われる多数の破片から象嵌が発見された。これにより、寺西一号墳の被葬者は、従来の想定よりもはるかに重要な人物であることが確定した。

以上の発見に伴い、新たに象嵌の研ぎ出し作業・破片の接合作業などが必要となったことを受けて、当初2年を予定していた保存処理期間を3年に延長することにした。これにより、計画の見直しが必要となったが、事業期間自体の延長はせず、当初予定通り2022年3月までの間に保存処理を実施し、あわせて寺西一号墳の研究を進めることとした。

また、今年度は、寺西一号墳およびその出土遺物を検討する研究会を3回開催した。そのうち1回は、国立歴史民俗博物館の仁藤敦史氏をお招きして、「六世紀の王権と東国豪族」と題する報告をしていただいた。寺西一号墳の被葬者像を検討するにあたり、当時の

中央政権と地方豪族との関係は重要な要素であるので、今後も研究会を継続し、6世紀後半の東三河に関する研究を進めていきたい。

なお2019年度には、本事業と関係するものとして、本事業では対象としない寺西一号墳出土鉄製品（大刀以外も含む）の中から主要なものを選び、愛知県埋蔵文化財センターにてX線撮影を実施した。ただし、残念ながら新たな象嵌は検出されなかった。

